

ホトトギス

昭和二十四年七月二十八日運輸省特別郵便物取扱局第六二七号
平成二十四年七月一日発行（第百十五巻第七号）

ホトトギス

七月号



俳句随想 〔三百六十一〕

汀子

俳句は季題を詠む詩である。季題の力に頼り、季題に語らせ、季題を生かして一句に命を吹き込むのである。

その季題に特に春夏秋冬の文字を入れなくてもその季題だけで春夏秋冬の意味を持つているのが季題である。別の季に使う季題のときのみに春夏秋冬を添えていかなければならない季題の使い方がある。その時は勿論春夏秋冬を使わねばならない。

「彼岸」は春の季題である。秋にも彼岸はあるがそれは「秋彼岸」と使う。「麗か」は春の季題であり、「春麗」とは使わない。冬に春のように麗かな日があるが、その時は「冬麗」「冬うらら」と表現する。「耕」は春の季題である。「耕」だけで春の季題となつて「春耕」とは使わない。秋に耕すときは「秋耕」また冬に耕すときは「冬耕」と季節を表すことが必要となつてくる。最近、「春うらら」が「天地有情」の投句に多いので、その句は取り上げなかった。何故その句が没になったか考えて頂きたい。ホトトギスでは季題を季語とは使わない。季節の言葉なら何でもいいのではなく、「季題」になるためには長い歴史が醸し出した選ばれた季節の言葉であることを知り、季題を大切に使う事をお勧めする。

旬日記 汀子

平成二十三年七月二日 芦屋ホトギス会

岳麓で学びし日あり月見草

七月三日 下菊句会

仕事の手休めては又藤椅子に

思ひ出と共に古りたる籐寝椅子

雷の予報心の隅に置く

七月四日 ロイヤル俳壇

着陸に立ちはだかりし雲の峰

生欠伸日傘の中で所在なく

咲き初めて影の明き合歡の花

熱き茶をすすする涼しさあることを

雲の峰崩れたるより雨夕べ

七月七日 悼 長尾虎風様

思ひ出の貢繰りつつ偲ぶ夏

七月八日 工業倶楽部

日除上げ俯瞰の景を楽しみぬ

巻き上げし日除に夕べ来てをりぬ

次の旅又次の旅合歡の花

七月九日 北海道ホトギス同人会

津波来し跡なきホテル灯涼し

じり消えて無事着陸となりしこと

誰彼の消息交はし旅涼しく

水無月の頃がまことに蝦夷らしく

七月九日 北海道ホトギス俳句大会前日句会

結局は齟齬なき旅路蝦夷は夏

邂逅の誰彼蝦夷の露涼し

玫瑰の花を見てある像を見る

咲き替り咲きつづ沼の旅涼し

暑いとは言はぬ旅路でありしこと

曾遊地として訪ふ沼の露涼し

七月十日 大阪倶楽部

涼しさを口に出したくなる日かな

涼しさは持つて帰れぬ蝦夷の旅

梅雨明けてをりたることも旅帰り
夕立のどつと来るかも知れぬ雲
ゆるやかに流れぬし水滝となる

七月十二日 綿葉倶楽部

汗引いてゆける消息聞きながら

簡まりメニュー一人の夏料理

納まりし話に汗の引くところ

汗忘れをりし一泊二日かな

七月十四日 清交社

雷怖れつつも機上の客となる

近づくし旅路はるけき月見草

兜虫くぬぎ林の秘密基地

線布さを知りしはたたがみ

雷返す話と雷神山といふ名持つ

木々裂けて雷神山といふ名持つ

雷雲の近づく方へ高速路

七月十六日 石見ホトギス俳句大会前日句会

草原のみどりに染まりゆくばかり

暑きこと山風さらひゆきにけり

七月十七日 石見ホトギス俳句大会

旅の夜を共に更かせし月涼し

夜を渡り来し朝月の露涼し

七月二十日 夏潮句会

台風の逸れし安らぎ集ひけり

人数の西瓜の待つてをりし席

ナイターや怒濤の如く波となる

飛入りの雑談止まず汗となる

海の日に集ひて地球ボランティア

饒舌を寡黙に受けて涼しさよ

七月十九日 有恒俳句会

雷にまさる眠気でありにけり

恐怖心なしとはいへぬ雷予報

汗忘れをりし旅路の二日間

七月二十三日 野分会夏行琵琶湖

短夜の湖畔の宿り宴果て
今宵泊つ湖畔に夏の月いづこ
汗拭いて語り尽くせぬ歴史あり

今日大暑案外凌ぎ易き日に
噴水の湖畔彩る夜の帳
琵琶湖畔悲しみ消えぬ夏が又

この暑さいとはぬ若さ羨しも

一日の落ちて夜は七色の噴水に

一列に並ぶヨットに風立てて

若者の涼しき声を先立てて

七月二十四日 野分会夏行

若さとは心の言葉夏行かな

ふと外の暑さ忘るる大玻璃戸

泳ぎたき子等賑はるるロビー

七月十九日 無名会

虹立ちて街の小さくなりけり

過去未来現在虹に結ばるる

気づく人気がぬ人も虹仰ぐ

雨雲の去り行く早さ虹を抱く

七月二十八日 きさらぎ会

消えてゆく虹あり雲を走らせて

山水の滴りとなるところかな

滴りのここより山路なりしこと

滴りを集めて音となるところ

七月二十八日 悼 瀧青佳様

露の世の道を教へて頂きし

七月二十九日 時雨句会

大幅に予定組替へ拭ふ汗

平和の世おそかならぬ原爆忌

七月三十日 東海ホトギス同人会

片陰の駐車場へとホテルマン

雲秋へ誘へるごとく高速路

通夜の座に待てるやくり夜の秋

汗引いてしまへば忘る旅疲れ

車降り立ち炎天につかまりぬ

同日 東海ホトギス俳句大会前日句会

旅しても一と夕立のほしきほど

露涼しいつか一人になつてぬし
七月三十一日 東海ホトギス俳句大会
二日目の涼しき帰路となりぬべし

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十三年七月三日 伝統俳句協会茨城県支部会

髪洗ふ今日はあなに会へるから
藻の花やあぶく一つに開きゆく

七月六日 カトリック新聞選者時

節電に地震に鎮もる夏館
衣更へて何時もの席へ一歩づつ

七月七日 蕉心会

未だ雲の気紛れ七月の都心
夏館会ひたき人に会へばなほ

あの佳人と気付きてよりの声涼しく
箱庭の人口密度高過ぎる

白南風の館の草木喜過る
ここよりの一步は日焼するため

七月八日 俳句研究 秋の句

この道は硯洗うてより進む
野分後明日が見えて来りけり

きつとある灯下親しく語る日も
秋の先祖父の声を思へば鳴来る

七月九日 北海道ホトギス同人会 大会

万緑の濃さが本州とは違ふ
降り立ち津軽海峡霞ふ

雲海の下被災地の如何ならん
初めの街涼しさと親しさに

雲霧の峰整ひゆくを眼下にし
函館の百万ドルの灯涼し

炎帝を遠ざけてゐる駒ケ岳
皆違ふ色して同じ万緑裡

七月十一日 朝日カルチャー若草句会

これよりの四万六千日遠し
毛虫這ふ七色の身をくねらせ

七月十四日 土筆会

露涼しやつぱり君が居なければ
露涼しを引も踏み外したる道

七月十五日 浜田吟行会

億年し苔むす寄せの樹齢は眠る
露涼しを引も踏み外したる道

去年とは違ふ暑さに降り立てり
風蘭をくりぬいてゐる目

喇叭手の涼しき音色聞えさう
夏涼しを驚かせたる鳶の笛

七月十六日 石見ホトギス俳句大会

三瓶蕎麦てふ涼しさを吸りけり
絵のやうな写真のやうな月涼し

七月十九日 草木瓜会

虹立ちて嵐の血きらきらと心太
ギヤマンの思ひ出の中心太

七月十九日 自宅近所のバーに贈る

灯涼し佳人がワイン注げばなし
ちやん付けで良き人生や露涼し

七月二十日 登嵩会

片陰の出来丸の内らしくなる
夏の海やつぱり君は来なかつた

夏の海戦艦長門沈みし日
マンゴいのための銀器でありけり

片陰を競ひ伸びゆく摩天楼
夏の海とは人集め魂集め

七月二十一日 野分会夏行

再会は涼しき距離を保ちつつ
秋近き風は比良より磨かれて

草水に少し緩んでゆく
打ツの帆一線たる余花自由

唐崎の松頂の涼いふかなり
神江富士徒へてゐる大蓮田

近江の松頂の涼いふかなり
じやんけん今日から僕は仏涼

五堂十人鐘の余韻を繋ぎゆく
蟬の時雨鐘の余韻を繋ぎゆく

鐘の音の途絶えてよりの暑さ
月の日や至誠に憚るなかり

七月二十一日 若水句会

海月涼し淡海の悲話を語るか
焼酎の注いで近江の一小民

七月二十六日 田鶴 五百鳥祝句

三井寺の鐘の音清しる月涼し
海月涼し淡海の悲話を語るか

宝物めく二歩三歩月涼し
涼風に関西人となりゆけり

七月二十七日 目黒夢句会

もう今日は考へられぬ夏休
旅に倦むことなく夜の秋となる

三井寺の鐘の音色も夜の秋
山荘の朽ち果てしまふ葡萄

ボルドーの昔日背負ひ葡萄
七月二十九日 カトリック新聞選者時

雲海に神の造化を確かむる
七月三十一日 東海ホトギス同人会 大会

音楽の街水無月の楽奏で
湖よりの風の果てなる街

七月の満ちた果てなる街
熊蟬の歌ふ駅前広場か

炎天に威を崩さざる天守かな
夜の秋グラスはみ出すワインの

城涼し池内家も徳川派

廣太郎選

早春へ開く少女の花 瞼かな
神戸山田佳乃

ありし日のままの書棚にある余寒
木の実植うより大切な場所として

同 同

早春や君は還らぬ旅に発ち 東京川口利夫

早春の遺影にこぼす涙かな
同

早梅へ悼むところを重ねつつ
梅の花一輪づつの空を持ち
熱海嶋田一步

白梅は日のはづみゐる色と見し
同

紅梅は日を吸ひ込みし色と見し
太陽に嵌りし風の消えにけり
徳島 同
岩田公次

寒といふ言葉叱咤のひびきあり 同

植系ありし苗木廃校記念とか
大楠といふ春光の発信地 奈良 古賀しづれ 同

人陽炎へり土に生き土に老い 同

分校に着く春泥の靴ばかり
うすらひの動くすなはち水動く
東京 今井千鶴子 同

しらうをの白にはあらず水の色	同
逆光に山茱萸の花ふと黒し	同

初日いま卒寿迎へし双肩に
福山竹下陶子

風花の象の背を越え消えにけり
同

悴みし姿勢の語る目差も 京都安原葉

悴んでゐても誘はれ出てゆく子 同

恋の猫月下の街を駆け抜ける 袋井湖東紀子

本堂へ長き廊下に踏む余寒
空白のありて初音と気付きたる
同 同

薄氷の解けたる水の平凡に
龍ヶ崎 今橋眞理子

日ざしより風に雪解の始まれり
同

スカーフにくるりと残る寒さ巻く
同
引く波は見えず寄すのみ湖小春 神戸千原叡子

臘梅や忌日の僧の御着き待つ
同

喪の明けし人を励まし二の替
恋猫に真闇の塀の高からず
香川 湯川 雅

数へられなきものに数木の芽吹く 同

その辺といふは曖昧青き踏む 同
燕来る十三代目和菓子屋に 神戸 涌羅由美

つばくらめ縦横無尽に空を裂き 同

レコードの針落す音春の闇
同
雛飾る小箱の値札八十銭
東京 橋本くに彦

暮れてきて目玉ぎらぎらうかれ猫
一と声は発火しさうなうかれ猫
同 同

雑詠句評（六月号より）

雅　・　一　歩　・　く　に　彦
純　也　・　仁　義　・　比　奈　夫
し　げ　人　・　佳　乃　・　さい　雪
暮　潮　・　廣　太　郎

喪心に暮らす子の家三ケ日 朝倉 井上醇女

御身内にご不幸があつて、喪の明けていない三ケ日でしよう。回りが、まだまだその哀しみを深く抱えている。互いに労わり合う喪心のままに、お子さまのお家で過ごされた。

ただ、例えば、お子様のお家で一緒に過ごされたとは言え、その寂しさは計りしれない。身内を失くして遺された者にとつて、一番淋しく、一番応えるのはお正月の三ケ日であろう。（雅）

平成二十三年十二月三日に、御主人井上弘堂様を亡くされた悲しみがひしひしと伝わってくる句である。正月を御子様の御宅で

過ごされておられるのだが、喪に服しておられるのだ。新年の季節である「三ケ日」が、悲しみを伴つて叙せられている。御子様の存在が極楽を感じさせてくれる。（廣太郎）

冬薔薇咲き切る力秘めながら 龍ヶ崎 今橋真理子

冬薔薇とは十月中旬頃から咲く薔薇として寒さにも強く、霜いたみなどもしないが剪ればもう咲いてはくれないという淋しさ、はかなさのようなものがある花である。日時をかけてゆつくりと咲き、またゆつくりと散るというか最終的には崩れてゆく花でもある。その冬薔薇のゆつくりと日を重ねながら咲く様子を作者は「咲き切る力」を秘めていると見た。所謂、直観的でなく逸らしてあるからいいよという句である。それが私達のいう客観写生でもある。（一歩）

本来の季節、つまり五月に咲く薔薇とは違い「冬薔薇」は、どこか寒々しい感じがするものだが、反対に薔薇本来の力強さその季節なりに感じさせてくれる。その微妙な雰囲気を見事にこの句は捉えている。目には見えない「咲き切る力」がしっかりと感じられる句である。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

ゆたんぽを沸かして一人暮らしかな	我孫子	副島いみ子
三食を炬燵で食べてひとりかな	同	
復興に湧ける被災地春浅し	仙台	赤川誓城
大綿に日暮れの早き出羽の郷	同	
俳句への道みちのくの道朧	奈良	古賀しづれ
一燭の朧の奥の観世音	同	
子規虚碧あはせ偲ばむ鳴雪忌	京都	安原 葉
下萌ゆる園内広き枳殻邸	同	
鴨浮寝文明と距離保ちつつ	東京	稲畑廣太郎
漱石忌真筆の声館に聞く	同	
これぞまあ神出鬼没嫁が君	川崎	栗林圭魚
坊城家にも現れしてふ嫁が君	同	
大冬木御苑の静寂深めたる	吹田	宮崎 正
邸の灯の水面に点る寒の池	同	
雪原の残照白き煙霧上げ	樺原	稲岡 長
雪搔いて現れし堤の下萌ゆる	同	
界限の人々ばかり初詣	徳島	上崎暮潮
老いたりや睦月半ばの初詣	同	

春雷と共に渡りて着きし島	東京	今井千鶴子
春雷の軽きひびきに異国の夜	同	
今日は目がすこし翳みてパンジー黄	神戸	後藤比奈夫
躊躇うてをりしは愛のチョコ自身	同	
枯芒焚き風の東焚きにけり	同	長山あや
焚いてさへぬれば忘れて春暖炉	同	
山茱萸黄虚子生誕の日の来たる	東京	大久保白村
おもざしのどこか哀しき吉野雛	同	
湖は暮れつつ鴨鍋は滾りつつ	神戸	三村純也
東風波に揺られつつ魴つくろへる	同	
クロツカス植糸しを忘れをりたるに	東京	河野美奇
川自慢白魚自慢ひとしきり	同	
喰うすくれなぬに春隣かな	熊本	岩岡中正
この町の春は城頭より来たる	同	
水芭蕉咲くや沢水ふくらみて	北海道	沖田希望
福寿草咲かせて貧も富もなし	同	
おしながきカタカナのなく梅見茶屋	熱海	嶋田 一步
客のなくなれば今日終へ梅見茶屋	同	

子選

天地有情句評

汀子

ゆたんぽを沸かして一人暮しかな

我孫子

副島いみ子

一人暮らしの自由を謳歌。

復興に湧ける被災地春浅し

仙台

赤川誓城

東日本大震災に立ち向かう歳月。我々は祈るばかり。

俳句への道みちのくの道朧

奈良

古賀しづれ

俳句への道に繋がるみちのくの復興への道。

下萌ゆる園内広き枳殻邸

京都

安原葉

東本願寺の要職を肩に負い乍ら見守る枳殻邸の春秋。

鴨浮寝文明と距離保ちつつ

東京

稲畑廣太郎

付かず離れず悠々と浮寝する鴨と人間の世界との距離。

これぞまあ神出鬼没嫁が君

川崎

栗林圭魚

お正月にも神出鬼没の鼠に対しての溜息。

大冬木御苑の静寂深めたる

吹田

宮崎正

大冬木に御苑の歳月を知った作者。

雪原の残照白き煙霧上げ

樺原

稲岡長

雪の積った原に日が沈む変化に見た煙霧。